

《報告》

螢狩の唄考 5
～多様化する語句と地域化について～

後藤 好正

神奈川県横浜市港北区新羽町 675-202

はじめに

前報では、詞章の類型性及び分布形態を踏まえた分類試案を示し、多くの型の唄を認めた。さらに伝播の過程で起こった異なった型の唄との混合や、語句の無意識あるいは意図的な変更の例をあげ、螢狩の唄の多様化の要因の一端にふれた(後藤, 2023)。

本報では螢狩の唄の呼びかけの言葉・誘いの言葉・指示する言葉やホタルの異称について、多様化した具体的な例をみるとともに、俚謡やわらべ唄の歌詞の転用や借用と考えられる例を示し前報を補足した。さらに、前報では触れられなかった地域特有性の高い形式の唄や、地域に固有の言葉を持つ唄についてみていきたい。

なお、引用文・掲載歌は旧漢字を常用漢字に改めたが、ホタルの漢字表記は螢で統一した。掲載歌は引用文献の表記を尊重したが、仮名遣いは現代仮名遣いに、促音・拗音については小文字に改め、踊り字は正字に直した。「螢」に「ほたる」以外の仮名が振られていた場合は、振り仮名を表記に用いた。引用歌・語句の採集地には都府県を〔 〕で示した。

ホタルの方言については主として『全国方言集覧 動植物標準和名⇒方言名検索大辞典』(白井祥平監修。以下、集覧)に拠った。

1. 民謡(俚謡)からの転用

前報では由来が特殊な唄として、民謡やわらべ唄・(創作)童謡の転用を示した。このうち、手毬唄の転用としておいた高知の「向こうの山に光る物」は、高知で同様の詞章を持つ労作唄が見つかったことから民謡(俚謡)からの転用の可能性が高い。その後の調査で同じように民謡(俚謡)を転用したか、あるいは元唄としたと思われる唄が確認できたので少し追記しておきたい。

○ 螢攻めるとて姉様しめた、しめて逃したあと口惜し、あれがよいドンドド、これがよいドンドド

○ 籠でゆくのは螢じあーないか、わたしゃ売られてタチバッコ(都会子の意)、ドンドン

前者は『日本民謡全集統編』(前田, 1907)の羽前(現在の山形県)庄内の“螢狩のうた”で、後者は『多摩方言と生活』(平井, 1983)に“螢取りの唄”として載る東京都西多摩地方の唄である。ともに唄の最後に囃し言葉があり、元唄は俚謡であると思われる。

岐阜県大野郡大八賀村(現高山市)で採集された

○ さてもやさしや螢虫、昼は草葉に身を隠し、夜は野に出て身をとます

も俚謡からの転用とみられる唄のひとつである。俚謡で詞章が似た唄としては雑謡として記録された

○ 螢虫い、昼は草葉に身を隠し、夜は此町に火をとます、ほーかいほほ [福島]

や労作唄の一種、田草取唄として歌われた

○ 可愛らしさや螢の虫は、忍ぶ暇に火をとます [広島]

などがある。また、大阪市の民謡「おんごく」の一節にも「なにかやさしや螢の虫は、草の葉陰で火をとます」

の歌詞がある。なお、竹久夢二がまとめたわらべ唄集『あやとりかけとり』にも動物の唄として

○何がやさしや、螢がやさし、おぐさ小草の蔭でびかびかと [採集地不明]

が収録されている。

2. 歌詞の借用

上笙一郎は『日本のわらべ唄』で、「毬つき唄やお手玉唄など古くから伝わっている多くのわらべ唄も、江戸時代の成人文化から物語や詩句をたくさんに取り込んでいるわけで、そこから帰納すれば、替唄の精神—おとな文化から遠慮会釈もなくいろんなものを借用してきて自分たちの財産にしてしまう方法こそ、取りもなおさずわらべ唄の精神なのかもしれない」（上、1972）と述べている。螢狩の唄にも他の唄から歌詞を借用し改変したと考えられる唄が存在し、そうした例として次の唄がある。

○螢ごんご山ごんご、山から光って飛んで来い、里の水はいやいや、川の水もいやいや、
利根川こえて、その向こうの葎っぺの露がしい

これは群馬の唄であるが、その歌詞から〈あっちの水型〉とされている。では次の唄を見て欲しい。

○堂々めぐり、こうめぐり一、あーわの餅もいやいや、米の餅もいやいや、蕎麦切そうめん食ひた
いな

このわらべ唄は江戸の僧、行智が幼少期（天明～寛政初年頃）に歌ったわらべ唄をまとめた『童謡集』（文政3年（1820）成）に載る「どうどうめぐり」という遊戯唄である（尾原、1991）。群馬の唄は「里の水／川の水」、「どうどうめぐり」は「栗の餅／米の餅」と拒否する対象こそ違うものの、波線部の言い回しや最後に「葎っぺの露」「蕎麦切そうめん」と望みを歌っていて、基本的な詞章の構成は同じである。この唄は行智の「どうどうめぐり」あるいは同様の詞章を持った類歌から「栗の餅…」以下の歌詞が取り込まれ、螢狩の唄に合うように水へと改変されたと考えられる。

他にも福島県岩瀬郡で歌われていた〈螢の親父型〉の唄の一つ、

○螢さん、螢さん、夜は提灯つけなんせ、昼は菜の葉にとまらんせ

の4句目「昼は菜の葉にとまらんせ」は、文部省唱歌「蝶々」の3句目「菜の葉にとまれ」の借用とみられる。この唄の初出は明治43年（1909）刊行の『諸国童謡大全』で、唱歌「蝶々」は明治14年（1881）発行の『小学唱歌集』初編に掲載されている。チョウのわらべ唄の可能性ももちろんあるが、今のところ『日本伝承童謡集成』や『福島のわらべ歌』をはじめとする主要なわらべ唄集で未確認である。この型の唄の多くは「昼は…、夜は…」と対句で表現され、さまざまなバリエーションがあるが、福島には「昼は草野にとまらんせ」や「昼は草葉のかげにとまらんしょ」といった歌詞の唄もみられ、「蝶々」の歌詞の借用も自然に行われたことだろう。

○ほうたろ来い 茶のましよー ゆうごうベットー 花咲かしよ 山伏来い 宿貸しよー

山本（1985）は新潟県佐渡島で採集されたこの唄の「ゆうごう（夕顔）べっとー 花さかしよ」の歌詞を意味不明としつつも、採集地の浜中部落には「泣きミノベットー花咲かしよ」という言葉があることから、悪口唄が取り入れられた可能性に言及している。

3. 多様な呼びかけの言葉・誘いの言葉・指示する言葉について

今井（1982）は短詞章のわらべ唄の発想に一定の類型性・定型性を認め、歌い手と歌う対象との心的関係から、(1) だまし型、(2) おどし型、(3) のろい型の3つに分類している。さらにだまし型はだます方法から4つに細分し、そのうちの1つを〔対象へのよびかけ〕＋〔行為・動作の命令・禁止〕＋〔甘言〕と

いう表現の定型を持ち、甘言によって対象をだまし、こちら側（歌い手）の願望を対象に聞かせる唄と定義している。今井はこのだまし型のわらべ唄のひとつとして〈あっちの水型〉をあげているが、甘言によって誘う螢狩の唄はこの他にも〈宿貸せる型〉〈玉子の水型〉〈鯨の頭型〉〈谷川の水型〉が該当する。

三石（2002）は長野県の螢狩の唄を呼びかけ言葉、誘い言葉、指示言葉に分け、北信・東信・中信・南信それぞれの地域で使われている言葉を紹介しているが、この呼びかけ言葉は今井の〔対象への呼びかけ〕と〔行為・動作の命令・禁止〕に、誘い言葉は同じく〔甘言〕に相当する。〔甘言〕には今井が示した「あっちの水…、こっちの水」以外にも多くの歌詞があり、またそれを実現するための指示言葉が続く唄も多い。ここでは全国的に歌われていた〈あっちの水型〉を中心に、〔対象への呼びかけ〕の冒頭句「ほうほう」と対象であるホタルの呼称、〔行為・動作の命令〕の言葉である「来い」について多様化した歌詞を見るとともに、甘言についても簡単にふれてみたい。

3-1. 対象への呼びかけの言葉

3-1-1. 冒頭句

一般に知られている螢狩の唄の歌い出しは〔（ほうほう）＋ほたる〕という構成になっている。この「ほうほう」は「ほたる」という同音のことばをおこす頭韻の働きをしており（仲井，1976）、他の動物の唄ではこのように歌い出されるものはなく、螢狩の唄の特徴の一つである。ただし、必ずしもすべての唄に見られるわけではなく、『日本伝承童謡集成』を見てもその半数以上はこの冒頭句を欠く。

1) 「ほうほう」

最も多く見られる言葉で、全国的に分布している。文献での表記は「ほうほう」の他に「ほーほー／ほおほお」がある。「ほうほう」の変形として「ほうほ／ほーほ」が埼玉・福井・長野・岡山・広島で採集されている。また、大阪で「ほうほうほう」、奈良で「ほうほうほうほう」と繰り返す唄が、栃木では「ほー」と一度だけで繰り返さない唄が採集されている。

2) 「ほ ほ」

文献での表記は「ほほ／ほっほっ／ほおっほっ／ほっほ」である。この語句も「ほうほう」ほどではないが、全国的に広く分布している。また、「ほ／ほっ」と繰り返さない唄が秋田・新潟・長野・三重で採集されている。

3) 「ほう〇 ほう〇」

「ほう」の後に「や」や「し」といった語が付いた形で、北陸地方に見られる。福井で「ほうしほうし／ほしほし」が、富山・石川では「ほうやほうや／ほーやほーや」が採集されている。また、石川の「ほーみ」もこの仲間に含まれると思われる。

3-1-2. ホタルの呼称

1) 「ほたる」

「ほたる」は歌う時は「ほーたる」となり、文献の「ほうたる／ほおたる」の表記も同一と見なされる。この系統は全国的に見られるが、東北地方では「ほだる／ほうだる／ほーだる／ほだある」と濁音化することがある。他にも「ぼうだる」〔青森〕、「ほたある」〔山梨〕、「ほったる」〔岐阜、三重〕などがある。

2) 「ほたろ」

「ほたろ」系統の方言はほぼ全国で記録されている。唄でのこの呼称は「ほたろ／ほーたろ／ほうたろ／ほおたろ／ほおたろ」などと表記されていて、関東～四国の各地から記録されている。やはり濁音化した「ほだろ／ほーだろ」が青森・岩手に見られるほか、「ほったろ」と促音化した唄が山形・茨城・山梨・長野・愛知・岐阜・大阪で採集されている。また福島では「ほ」が脱落した「たろ」と歌う唄もある。

3) 「ほうち」

『守貞漫稿』（喜田川守貞著、嘉永6年（1853）成）に「蓋京坂の童は螢をほうちと云う」とある。集覧でも「ほーち」が京都・大阪に見られ、「ほーちん」が広島で記録されている。唄では大阪・兵庫で「ほうち」が採集されているほか、「ほうち」の変化した「ほち」が滋賀で、「ほっちん」が福井で、山口でも「ほうちん」と歌う唄が採集されている。

4) 「ほた」

最後の「る」が脱落した形で、方言としては「ほた」が山口、「ほだ」が青森・岩手・秋田・山形、「ほたー」が鳥取・島根・佐賀、「ほーた／ほーだ」が岩手・秋田・山形、「ほった」が青森・岐阜と、主に東北地方と中国地方で使用されていた。螢狩の唄では岐阜の「ほた／ほった」以外は、「ほだ」〔秋田・山形〕、「ほうた」〔岩手・山形・福島〕、「ほうだ」〔岩手・山形〕と、いずれも東北地方から採集されていて、中国地方での用例は未見である。

○たあよ、たあよ、高飛びすなよ、低飛びせえよ

と香川で歌われていた「たあ」はホテルのことだが（山崎、1976）、これも「ほたあ」と歌われていたものが「ほ」が脱落し「たあ」に変化したのではないかと考えられる。

5) 「ほとら」

方言「ほとら／ほーとら」は新潟・富山・石川・福井・長野で使用されていた。唄では北陸で見られ、新潟で「ほとら」が、石川では「ほーとら／ほーとら／ほうとら」と表記されている唄が見られる。また、石川では「ほーとろ」への変化も見られる。

6) 「ほたら」

方言「ほたら／ほだら／ほーたら／ほったら」が埼玉・新潟・石川・三重・奈良・高知で使用されていた。唄では四国の愛媛で「ほうたら」が、高知で「ほーたら」が記録されているほか、岐阜で「ほったら」が採集されている。

7) 「ほてら」

方言「ほてら／ほーてら」は新潟・長野で使用されていた。唄では「ほてら」が新潟・山口で、「ほってら」が長野から記録されている。

8) 「ほたり」

方言「ほたり／ほーたり／ほたりこ」は千葉・富山・鳥取・島根・熊本で、「ほーたり」が鳥取・宮崎で、「ほったり／ほったりこ」が富山・石川・福井・長野・岐阜・三重・滋賀で使用されていた。唄では長崎のみで記録されている。

9) 「ほたい」

方言「ほたい」は宮崎・鹿児島で使用されていた。唄では熊本・宮崎から記録されている。

10) 「ほたれ」

方言「ほたれ／ほーたれ」は富山・高知・福岡・熊本・宮崎・鹿児島で使用されていた。唄では宮崎のみ採集されている。

11) その他

その他ホテルから変化した呼称に「ほだいろ／ぼたあいろ」〔青森〕、「ほたう」〔三重〕、「ほーろ」〔島根〕などがある。

愛媛県松山市道後にはホテルの方言「とっちーん」が歌われた唄

○とっちーん つーる亀 頭のひーか光る 義安寺

があるが、この「とっちーん」は「ほうちん」系統の呼称「ほっちーん」のハ行とタ行の音の入れ替えて生じたと考えられる。

山形には「ほだ来い、よね来い」のように「よね／よんね」という呼称もある。武田(1981)によると『『ほだ』はほたる、よねは『よねほたる』ともいい普通のほたるのこと』で、「よね」は「よねほたる」のほたるが省略されたものである。

ホタルの呼称の多くは基本的にはその地方の方言と一致しており、唄が地域に根付く過程で方言化していったことが分かる。

3-2. 命令の語句「来い」の変化

「来い」と命令する唄は全国的で、「来い来い」や「来い来い来い」と重ねて歌う唄も広い地域で記録されている。神奈川・長野・石川・岐阜・三重・大阪では長音化した「こーい／こうい／こおい／こおい」が、大分・宮崎・鹿児島では「い」が省略された「こ」のみの形が記録されている。他にも、「け／けー／けえ」〔岡山・福岡・熊本〕、「こいよ」〔静岡・大分〕、「こうよ／こおよ」〔長野〕、「こいや」〔富山・大阪・岡山・大分・宮崎〕、「こえ」〔山形・島根〕、「くうい」〔島根〕などが見られる。

宮城や山形県上山市では命令形の代わりに「ござれしよ（おいでなさいよ）」と優しく誘っており、さらに山形や新潟でも「ござい／ござい」と歌われていた。

東北〔青森・岩手・秋田・山形〕や北陸〔富山・福井〕、九州〔長崎・宮崎〕では「来い」の代わりに「下がれ／くだれ／下がらんせ／さがらっしゃい」などと歌う地域もある。特に北陸や九州では「一寸五分」〔富山〕、「一寸二寸」〔宮崎〕などと具体的な距離まで指示している。また、山形には「ほーたるさん、あがらっしゃい」と歌う唄もある。これには「螢が小川の向ふの草叢などの中で光ってゐる時呼び出す唄」との注があり(齋藤, 1931), ホタルを捕まえたい子供達は、飛翔しているホタルには「来い」や「下がれ」と歌ったが、草の葉に止まっているホタルには飛び立つように願って「あがれ」と歌ったのである。

3-3. 誘いの言葉

3-3-1. 甘言の言葉

今井(1982)は甘言によるだまし型の定型を4つあげている。そのうちの1つ

a. Aせよ。(私がBしてやるから。) あっちのxはCだ(が), こっちのxはDだ(から)。

の定型が〈あっちの水型〉に相当する。しかし、前述した通り、この甘言によるだまし型の螢狩の唄は他にもいくつかの型があり、それらは今井の示した

b. Aせよ(するな)。(なぜなら) (私が) Bしてやる(から)。

の定型に相当する。

〈あっちの水型〉にしても、江戸時代化政期の名古屋で「螢こい」に続けて「露のましよ」(『熱田手毬歌』高橋仙果, 1830-31頃成)、「水のましよ」(『尾張童遊集』小寺玉晁, 1831序)と歌われていたように(尾原, 1991)、「あっちの水は…」の前後にさらにbの定型が付く唄も多い。定型bの甘言Bに相当する部分の語句は、基本的には「与える」「飲ます」「^{たべ}食さす」「汲んでやる」などを意味する語句がほとんどだが、中にはホタルの持ち物と歌手の持ち物を交換してやる、という意味の歌詞もある。具体的に見られる語句には次のようなものがある。

1) 「与える」系統

やろ／やろう／やと、あげよ／あがせ、くれる／くろ／くりゅう／くりょう、やるぞ／やるに／やる、けんべ、けらわ

2) 「飲ます／食べさす」系統

飲まそ／飲ましよ／飲めよ、^か食せる／^は食め／はまちよ

3) 「汲んでやる」系統

汲んでやろ／汲んだろぞ／くんじゃろ／汲んでくりよ、すくったろ／すくてやろ

4) その他

買ってやっど、もらいにこい、かえてやる

3-3-2. 誘うアイテム

ホタルを誘うアイテムとしては水系統、食べ物系統、その他に分けられる。

1) 水系統

水辺に生息し、飼育下でも水を与えると長生きすることは昔から知られており、江戸時代にも水や露が歌われていたのは前述した通りである。最も広く歌われている水も「みず」のほか「ぶう」〔愛知・島根・山口・宮崎〕、「ぶぶ」〔京都〕、「ぶ」〔島根〕、「ぶい」〔兵庫〕、「ぶんぶ」〔岐阜〕、「びや」〔長崎〕、「みん」〔長崎〕、「み」〔富山・石川・島根・広島・山口・高知・長崎・宮崎・熊本〕、「みざ」〔鳥取〕、「みぞ」〔山口〕、「みんず」〔岩手〕と方言や訛語・小児語へと変化している。

水系統は他の飲み物も歌われているが、最も多いのが乳で〈宿貸せる型〉は基本的に水の代わりに乳となっている。他にも「茶」〔新潟・愛知・香川・徳島・愛媛〕、「甘茶」〔大阪〕、「酒」〔長崎・宮崎・鹿児島〕、「甘酒」〔長崎・鹿児島〕、「酢」〔島根〕がある。

さらに「甘い水」〔埼玉・京都・鳥取〕、「清水川の水」〔宮崎〕、「山の河原の水」〔長野〕、「豆川の水」〔熊本〕、「天の川の露」〔和歌山〕、「から竹藪の露」〔石川〕などの、味や場所を具体的に表現している唄もある。

2) 食べ物系統

水の代わりに食べ物で誘う唄では「粥餅」〔長野〕⁴⁾、「柳もち」〔埼玉・東京〕⁵⁾、「飴」〔長野〕のような例がある。〈鯿の頭型〉では「鯿の頭」を「煮て」「焼いて」と調理法が続くものがある。また、「鯿の頭のつゆ」には「汁」に「露」の意味が掛けられているのかも知れない。

3) その他

飲食物以外では〈宿貸せる型〉の「宿」がある。直接「宿」とは歌っていないが、京都では「寝るとこなかったら、こっちこい」と誘う。「金」^{かね}で誘う奈良の唄では、一緒に「巾着（財布）」も持ってこいと指示する言葉が続く。愛媛の「火やろ」ではホタルは答えてくれなさそうだが、大阪では「おまえの灯はうその火、おんの火はほんまの火」ともう一捻りされている。京都府丹波地方の「露草たくさん、ごちそうしょ」は、捕まえたホタルを露草とともに螢籠に入れたことを踏まえて生じた歌詞だろう。青森の「さんじゃく（兵児帯のこと）」や新潟の「こがねむし」「こふねの花」、兵庫の「菖蒲」となるとホタルも騙されないのではないかと思うほど子供達の発想は自由である。

3.4. 指示言葉

螢狩の唄には〔命令（来い）〕の後にさらに「～しろ」という具体的な指示の言葉がつく唄も多い。

1) 「～を見て来い」系統

この系統は〈山道来い型〉に多く見られるもので、基本は「行燈の光を見て来い」であるが、「行燈の光」が「窓のあかり」^{あんど}、「山の行燈」^{あんだ}、「阿弥陀の光」と変化している。

2) 「～持って来い」系統

〈あっちの水型〉や〈谷川の水型〉など「水」を与える唄では、さらに水を汲む道具や入れる器を持って来いという指示言葉が続くことも多い。歌われているものには柄杓類がもっとも多く、他には「樽」〔青森・秋田〕、「桶類」〔秋田・新潟・福岡・長崎・宮崎〕、「菓罐」〔兵庫〕、「銚子」〔福島〕、「徳利」〔大阪〕、「茶碗」〔福岡・宮崎〕、「盃」〔島根・宮崎〕、「釣瓶」〔岡山〕などがあり、島根や徳島ではこれらの代用品として「貝

殻」が、佐賀では果物の皮である「ちよっぱけ」が歌われている。また、青森や岩手では樽は人でも大きいと感じたためか「持って来い」ではなく「背負^{しよ}って来い」とも歌う。

3) 「～飛んで来い」系統

命令の「来い」にさらに「飛んで来い」と指示する言葉が続く系統。ホタルが発光しながら飛翔する様子から発想された「螢のあかりで」「お尻（おしり・おけつ・おいど）の光で」のように自身の光で飛んで来いと歌うほか、携行照明器具であった「提灯⁷⁾」「行燈」をホタルの光の譬喩とした「提灯さげて」「提灯とぼして」「行燈の光で」などの唄がある。「行燈の光で」はさらに変化して「阿弥陀の光」「ゆうべの光／よんべの光」と歌われている。

「～から」と飛び立つ場所や「～越えて」と通過する場所が歌われている例としては、「山から光って」「山の峰から」「山の中から」「山中越えて」「山道越えて」「向こうの山から」「柳のしたから」があり、飛んで来る場所を指示する「甘い方へ飛んで来い」もある。

3-5. 脅しの言葉

今井（1982）は〈だまし型〉の裏返し^{つばくら}の発想法として〈おどし型〉を定義している。螢狩の唄の〈燕にのまれる型〉の本来の形がこの型にあたり、「上さあがれば燕にのまれる」と脅すことによってホタルに歌い手の願望を実現させようとしている。この他に脅す言葉を持っている唄としては、鳥取・島根の「あっちに行きやあ、ばばあがもめん針立てるぞ」や長野の「あっちは狐にとられるぞ」がある。

さらに今井は〈だまし型〉〈おどし型〉の両者が一つの唄の中で同時に用いられることもあると述べるが、〈だまし型〉の例としてあげられている〈あっちの水型〉にも「早来てのまんと、うじがわいてのめん」〔愛知〕、「はよ来て飲まな、猫の子が飲んでくぞ」〔三重〕といった脅す言葉が続く唄もある。

4. ホタルの異称

呼かけの言葉を繰り返す唄では、2回目のホタルが他の語句に変化していることも多い。

4.1. 山伏・山吹

〈山道来い型〉〈宿かせる型〉の山伏・山吹で、わらべ唄集ではこれをホタルの異称あるいは方言と注解している。実際にホタルの特に大きなもの、あるいは雌ホタルを山伏・山吹と呼ぶ地域は多いが、ホタルの異称としては不自然であり、筆者は以前、螢狩の唄に歌われたことから“山伏”がホタルの異称へと転化した可能性を指摘した（後藤，2021）。なお、山伏・山吹が変化したとされる言葉に、山鳩、山鳥、山彦、山虫、山太郎、山姥、山法師がある。

4.2. 田の虫

「田の虫」は神奈川・静岡・三重・京都・奈良・大阪・和歌山・兵庫・徳島・高知の各府県から採集されている。ゲンジボタルは水田周辺の河川にも生息し、また水田に生息するヘイケボタルもいることから、「田の虫」という呼称が生じるのは自然であるが、ホタルを田の神の使いと見た名残（後藤，2021）とも考えられる。神奈川・山梨・奈良・和歌山・愛媛の唄には「たまむし」があるが、日本にはホタルを魂と同一視する民俗があることから、「田の虫」から転化したのではないかと考えられる。また、奈良や愛媛にはやはり「田の虫」が変化したとみられる「たのもし」がある。

静岡・奈良・和歌山・大阪・兵庫・徳島・愛媛で採集されている「太郎虫」について右田（1986）は、「ほたる」のもじりか「田の虫」の転か明らかではない、と述べている。両者の分布域を考慮すると、これは「田の虫」

と歌われていたところに方言の「ほたる」を踏まえた「太郎虫」という呼称が生まれたと見るのが自然である。大阪では「とらむし」が記録されているが、これも方言「ほとら」を踏まえた呼称であろう。新潟には「唐虫」と呼ぶ唄があるが、「とらむし」がさらに変化したものであろうか。

なお、三重では「つち虫／土虫」⁸⁾「小虫」の呼称があるが、その由来は不明である。

4.3. 人名

クモやカタツムリなどを含めた広義の虫を歌ったわらべ唄で、対象を特定の人の名で呼ぶことはホタル以外にはほとんど見当たらず、螢狩の唄の特徴のひとつである。それらは具体的には修験者風の名前と男性の名前が使われている唄がある。

4.3-1. 修験者

山伏あるいは修験者らしき名前には「かんねん」「じょうねんぼう」の2種類がある。三谷 (1954) は『かんねん』というところからいえば、『常念坊』のネンとも関連して、何か山伏の名のように思われる」と述べている。

1) 「かんねん」

「かんねん」は群馬県ならびに隣接する長野県東部に見られ、一部では「かんね」に変化している。柳田国男は『分類児童語彙』で「この螢捕りの詞をカンネ来いと言い、そのカンネの意味がまだ少しも明らかになっていない」と意味不明の言葉としている。三石 (2002) は、群馬県でホタルの保護活動をしていた丸岡文夫から「かんねん」という超人的修験者の伝承があること聞いたと紹介している。

阿部 (2013) はゲンジボタルの方言として「かなぶん」をあげ、その派生関係にあると思われる方言として長野県上田市の「かんねん」をあげている。また、カナブン類の方言に群馬県佐波郡でカンネン、コガネムシ類の方言に群馬県安中市・碓氷郡松井田町でカンネンコ、長野県北信・東信地方でカンネン・カンネ・ガンネ・カネムシ・ガンネンムシ・カンネームシがあり、螢狩の唄で歌詞に「かんねん」が歌われている地域と重なっているので、コガネムシ・カナブン類の方言「かんねん」が唄に取り込まれたと考えられる。

2) 「じょうねんぼう」

「じょうねんぼう」系の呼称は主に三重で使用されており、他にも「じょうれんぼ」「ようれんぼ」「ゆうれんぼ」と変化している。また、奈良で「じょうれんぼ」、滋賀で「じゅうれんぼ」の用例がある。

「じょうねんぼ」にはこれまで「かんねん」のような伝承は確認されておらず、その由来についての論考も見当たらない。筆者はこの呼称はわらべ唄の遊戯唄の一つ“草履かくし唄”から歌詞を転用したのではないかと考えている。墨 (2007) によるとこの遊戯唄は「いっけんじょ」類、「草履さんじょ」類、「ちゅうねんぼ」類に分けられ、歌詞の構成要素・唄の分布状況・遊び方から前記の順で成立し、方言圏論と同じ様に京都を中心として分布を広げたとされる。この最後の「ちゅうねんぼ」類は西日本を中心に広く分布している。柳原書店刊『日本わらべ歌全集』に載る三重の唄の前半は、「下駄かくし、ちゅうれんぼ、橋の下の、ねずみが、草履くわえて、チュツチュクチュ、…」である。

草履隠し唄では、2句目の「ちゅうねんぼ」が「ちゅうれ(り)んぼ」とナ行とラ行の音の入れ替えが生じたり、「ちゅうねんぼ／ちゅうれんぼ」が「じゅうねんぼ／じょうれんぼ」と濁音化した例が見られる。この濁音化した「じょうれんぼ」を「〇〇坊」のような山伏・修験者の名前と見做して唄へ取り込み、その後「じょうねんぼ」へと変化したのではないだろうか。

この「じょうねんぼ」の歌詞を持つ唄は〈あっちの水型〉などにも見られるが、一つの定型を持った唄の一群があり、それらは以下の唄である。

- ほうたる来い, 常念坊, じょうは天下の橋の上, 山道越えて飛んで来い [三重]
- ほうたるこい, 常念坊, じゅは天満の橋の下, 山道越えて飛んで来い [三重]
- 螢来い, 常蓮坊, 壤から天から橋の下, 大町越えて飛んで来い [三重]
- 螢来い, じょうれんぼ, じょうれん鉄砲の橋の下, 橋より低う飛んで来い [奈良]
- 螢こい, じゅうれんぼ, じゅは田圃の橋の下, 木橋越えて飛んで来い [滋賀]

これらの定型の構成要素は、[ホタル] + [命令(来い)] + [じょうねんぼ] + [じょうは～の橋の下] + [指示言葉(～飛んで来い)] となる。これらの唄の元は「螢来い, 山伏来い, 山道越えて飛んで来い」という(山道来い型)の唄であったと推定され、「山伏」に具体的な「じょうねんぼ」という名を当てた。また、構成要素下線部の「じょう」は「じょうねんぼ」を受けた言葉で、続く「～の橋の下」は「橋の下のねずみが...」の「橋の下」と同じで、墨の「草履きんじょ」に分類される静岡県志田郡大井川町の草履隠し唄に

- 草履きんじょ, 草履きんじょ, おてんまてんま, 橋の下の菖蒲は, 咲いたか咲かぬか, まだ咲きそろわん, ぎょうぎょう車で, 手にとってみたらば, しどろくまだろく, そらまで, ぎーちよん

があり、「～の橋の下」はこの「てんま, 橋の下」が取り込まれ「天満の橋の下」となり、それぞれの歌詞へと変化していったのであろう。三重には静岡の唄と同じ詞章の唄はみられないが、長野県北佐久郡御代田町には「ぞうりきんじょ, きんじょ, てんば, てんば, てんば, 橋の下 菖蒲咲いたか, ...」が、福島県いわき市でも「草履きんちよ, きんちよ, お天まてんま, ...」の歌詞の唄が記録されていることから、かつて三重でも「てんま, 橋の下」の歌詞を持つ「草履きんじょ」類の唄が歌われていたと見てよかろう。

なお、三重以外では愛媛で

螢来い, 常念坊, あっちの水は泥水, こっちの水は清水, 一杯飲まそに飛んで来い
が採集されているが、ほぼ同じ歌詞の唄が三重から採集されており、それが伝わったとみられる。

43-2. 人名

螢狩の唄にはホタルの異称に特定の人名が用いられている場合がある。これについて、河原(1981)は『とら吉』とか『とう吉』など、人の名まえになぞらえているのは、子供たちの螢に対する親愛感の現れであろう」と述べているが、相馬(1976)はホタルの光を死者の魂とし「太郎吉」「金吉」などを“早死にした子ども”の名前と見ている。ホタルの異称として人名が使われているのは、主として京都・滋賀・岐阜・三重・愛知である。

1) 「たろう」類

「たろう」は「ほたる」の「ほ」の音が脱落したもので、これがホタルの異称の人名化へと繋がったのではないか。岐阜で「螢来い, 太郎来い」「ほつたろ来い, たろう来い」「太郎来い, 山伏来い宿かせる」、兵庫県播磨地方で「たろ来い, たろ来い」「次郎来い, 太郎来い」「太郎来い, 太郎来い, 万太郎来い」「次郎来い, 太郎来い, 万太郎来い」と歌われているが、これらは岐阜と兵庫でそれぞれ別に生じたものであろう。

2) 「かねきち」類

「かねきち」が京都・滋賀・兵庫、「たろきち」が京都・奈良、「とらきち」「とうきち」が愛知で採集されている。これらの呼称は、京都で「たろう」が「たろきち」を経て「かねきち」へと変化し周辺へと広がり、愛知では「たろきち」がホタルの方言「ほとら」を踏まえ「とらきち」へ、そこからさらに「とうきち」へと変化したと考えられる。なお、福井ではやはり「かねきち」が変化したと思われる「かめきち」が、岡山では「かみきち」が採集されている。

3) 「かねじろ」類

岐阜では「かねたろう」「かねじろ」「かねしろ」「かねごろ」が、三重で「かねじろ」「かねしろ」「かねごろ」が、滋賀で「かねじろ」、兵庫で「かねじろう」がそれぞれ採集されている。さらに三重では「かねごろ」が変

化した「かめごろ」が、滋賀でも「かねじろ」が変化した「かめじろ」「たけじろ」「かみじろ」が見られる。これらの呼称に「三郎」が生じなかったのは、「(かね) たる (太郎)・じろ (二郎)・しろ (四郎)・ごろ (五郎)」は「ろう」が一拍子で歌われ四音となるが、「三郎」では五音となり収まりが悪くなるためだろう。

4) その他

「かねきち」から変化したと考えられる呼称として、岐阜の「かねのり」「かねまつ」「かねまる」「かねもち」「かなもり」、愛知の「かねくり」、三重の「かねひろ」「かねきりよ」、岐阜・愛知の「かねもり」がある。

ホタルの異称として用いられた人名には「かね」と付くものが多い。これには「兼」「金」「鉄」の漢字が使われているが、わらべ唄が口頭伝承である以上採集者や編著者による宛字である。ホタルの研究者として知られる南喜市郎は「さらに『鉄次郎』とか『鉄吉』の語があるが、この鉄は江戸時代に流行したおはぐろに由来しているのである」と述べていて掲載歌の「鉄次郎」の註には「鉄次郎＝ホタル類の翅の色がおはぐろの鉄色に似ていることにより来た言葉」と具体的な理由を示している(南, 1960)。しかし南の説は、「鉄漿(お歯黒の別称)」と「かね」が同音であることから、お歯黒の色とホタルの翅の色を結びつけたように感じられ、説得力が弱いように思える。

では「金」はどうであろうか。〈螢の親父型〉の「螢の親父は金持だ、道理でお尻がピカピカだ〔岩手〕」や類歌は北関東から東北にかけて見られるが、浅野(1988)は「螢があのようにお尻がピカピカ光るのは、親父さんが金持ちだからという子供らしい空想の所産である」と解説している。昔は燈油として使われていた菜種油は高価であり、毎晩光を点すことのできるホタルは父親が金持ちだからに違いない、という発想である。こうした発想は容易にホタル自身が金持ちという考え方に変化したと想像でき、ホタルに人名が生じた際に「かね」が用いられた要因のひとつとなったのではないか。さらにこの地域には、「螢来い来い黄金の虫よ」〔滋賀〕、「ゆんべの光に、金持って来い」〔愛知〕、「巾着持って来い、金やるわ」〔奈良〕の唄が見られる。また、方言で三重県鳥羽地方でコガネムシを「ホータロ」(『集覧』)と、青森県南部地方でコガネムシ・カナブンを「ホダルムシ・ホダムシ」(工藤, 2008)と呼んでいる例もあり、ホタルと「金(かね)」は結びつきやすかったと考えられる。

4.4. ホタル以外の生き物

異称とは言えないが、ホタルの代わりに他の生き物に呼びかける唄がいくつかある。

○ほうたるこっこ、とらこっこ、虎に追われて飛んで来い、

ほうたるこっこ、しろこっこ、しろにまけずに飛んでこい

[群馬]

「しろこ」は、しろばんば・雪虫・綿虫などと呼ばれる、ワタアブラムシ科のうち白色の蠟物質を分泌する有翅虫の方言である。晩秋から初冬にかけて空中を漂う綿虫に呼びかけるわらべ唄には、〈あっちの水型〉に類似する唄もあり、螢狩の唄に「しろこ」を取り込み易かったと思われる。埼玉のコウモリのわらべ唄にも「こうもりごっこ、しろごっこ、針金持って来い、焼いてやる」と「しろこ」が歌われている唄がみられる。「とらこっこ」は方言「ほとら」を踏まえた呼びかけで、そこから「虎に追われて」の歌詞が生じ、対となる後半部分は「とらこ」に似た音の「しろこ」を用いて歌詞が作られたのだろう。

富山県大門町の唄の「めめんじゃころ」について黒坂(1988)は、「目目雑魚」の意で、『めだか』の方言と注している。一方、砺波市の唄の「めんじゃ¹⁰⁾こ」を三石(2002)は「かわいい」の意としており、ホタルに対して可愛いと歌っていたのが、似た言葉のメダカに変化した可能性が考えられる。

この他にも、岐阜で「上る虫(カメムシの方言)」、長野で「あまびら(蝶・蛾)」、神奈川で「鶴」の例があるが、これらがなぜ歌われるようになったのは不明である。

4.5. 意味不明・その他

ホタルの異称には由来不明なものも多いが、いくつかの語句には若干の私見を加えた。

○ホーホーほたるこい、かなべらこい、螢の親父は金持で、昼は草さのめにとまり、夜はこの町で火をとます

これは茨城の〈螢の親父型〉の唄で、ホタルの異称として「かなべら」が歌われている。この「かなべら」については意味不明であるが、同じ茨城のコウモリの唄の「こうもり来い、さんしょくろ、金籠持って来い、焼いてやる」と関連がありそうである。

○ほったろさん、かまもりさん、夜はちょうちん、さかのぼり

長野県上伊那郡川島村（現辰野町）の〈螢の親父型〉の唄で、「かまもり」はコウモリの古語カハモリの転化したもの。

○ほたるこい、まっころこい、行燈のひかりで飛んで来い、上の水はにがいで、下の水はあまいぞ、
ほたるこい、まっころこい [京都]

高橋（1979）は「まっころ」に「まっ黒」の字を当てており、体の黒いホタルを呼んでいると解釈したのだろう。ホタルの体色は黒色であるが、昼は淡紅色の前胸背が目立ち、夜は光だけが見えるので、ホタルを呼びよせるのに「まっくろ」と呼びかけることには疑問も残る。

○ほったろこい 乳こう、あっちの水あ苦いぞう、こっちの水あ甘いぞう、ほったあ ほったあ 乳こう

この石川県金沢市の唄には「乳」に「ちんちら」の仮名が振られている（金沢口承文芸研究会、1981）。他の類歌でも「乳」を「ちっち」と歌っており、「ちち」が「ちっち」となり、さらに変化して「ちんちら」となったのだろう。新潟の「ちんちん」も同様に「乳」の変化したものかもしれない。ただし、なぜ「乳」に対して「来い」と呼びかけるようになったのかは不明である。

その他にも「あえだろ」〔青森〕、「めんめん」〔群馬・埼玉・東京〕、「さいせん、べっちょ」〔長野〕、「かなばち」〔静岡〕、「じんごめ、ぱっぱろ、おいのこ」〔愛知〕、「なんばる、かんちろ」〔三重〕、「こつこつ」〔奈良〕、「こんころ」〔和歌山〕、「びんびん、しょうぶ」〔兵庫〕、「ぶんぶん」〔広島〕、「でんでん」〔山口〕などがあるが、これらについては由来も意味も不明である。

5. 螢狩の分類試案 2 地域特有の唄

前報の分類試案では螢狩の唄を分布域を考慮し、(1) 全国的に見られる唄、(2) 一定の地域で歌われた唄、(3) 伝承地が点在する唄、(4) 限定された地域で歌われた唄、(5) その他の唄に分けた。(4)・(5) は分布域が限られているため地域性の強い螢狩の唄であり、前報では触れなかったこれらの唄について見てみたい。

(2) 一定の地域で歌われた唄

前報でこの形式の唄に 12 の型をあげたが、さらに 2 つの型を追加したい。

⑬ 〈常念坊橋の下型〉

螢来い、常念坊、じょうは天満の橋の下、山道越えて飛んで来い [三重]

※ 三重・滋賀・奈良で採集されている。この唄に関しては 4 章で詳述した。

⑭ 〈山からあだけて型〉

螢来い、¹¹⁾やんまい、山から^{まく}転れて怪我すなよ。 [兵庫]

※ 「山からころげて」「山から落ちて」などと歌われる。類歌は兵庫県各地で採集されているが、その多くは〈あっちの水型〉と混合している。この型は兵庫の他に岡山と香川で記録されている。

〈追記〉

○ほったろ来い、たのもし来い、行燈の光で、簀着て笠着てとんで来い [奈良]

「簀着て笠着て」の歌詞は関西とその周辺、山陽・四国の一部から記録されているが、詳細については以前に示した(後藤, 2021)。奈良や兵庫には他の型と混合していない上記のような唄があり、歌詞の分布が広域であるので、この形式の型とするべきかもしれないが、さらに検討を要する。

(4) 限定された地域で歌われた唄

分布域がおよそ1つの都府県に収まっているが、類歌が複数確認されている唄。

① 〈だんこ抜け型〉

ほたる ほたる、だんこぬけほたる、だんこぬけても光ればええ [岩手]

※「だんこぬけ」は腰抜けのこと(千葉, 1985)。岩手県の盛岡市を中心に歌われていた唄であるが、青森県七戸地方での採集記録がある。

② 〈お山の梵天型〉

ほうだろさん、下がらんしょ、お山の梵天、高提灯 [山形]

※歌詞の「お山の梵天、高提灯」を「夜は～高提灯」の派生とみなして〈螢の親父型〉とされるが、ひとつのまとまった定型を持つようになった唄で、山形県の村山・置賜地区で採集されている。

③ 〈花が咲いた型〉

螢こい 螢こい、カボチャの花も咲いだすい、キュウリの花も咲いだすい、
ナスビの花もさいだすい、螢こい 螢こい [新潟]

※ 粟島から採集された唄で、類歌は村上市や南蒲原地方に見られ、下越地方の唄である。

④ 〈親孝行虫型〉

ほうたるこいこいこい、ほたるの虫は、親孝行虫で、親をたずねてこいこいこいこい [千葉]

※ 上総地方で歌われていた唄で、採集されている唄のほとんどが混合歌となっている。

⑤ 〈異な異な虫型〉

螢という虫は異な異な虫で、夜なべになると、ぴっかんちゃかん火をともす [山梨]

※「異な異な虫」は不思議な虫の意。山梨で歌われていた。

⑥ 〈油のないのに型〉

ほ一ほ一螢の虫は油のないのに火をともす [和歌山]

※ 那賀郡・海草郡で歌われていた唄。

⑦ 〈お前のお連れ型〉

ほ一ほ、ほうたるこい、お前のおつれは何処にいる [和歌山]

※ 海草郡のみ記録されている。

(5) その他の唄

(1)・(2)の型式と類縁関係の認められない地域性の高い唄で、基本的には単独で知られる。これらの唄は命令の言葉を持つものと持たないものが混在し、後者は俚謡が転用あるいは元唄となったものも多かったのではないと思われる。ここに該当する唄は、数も多いのでその一部を示す。

○ほたる ホイ、さんじゃく 三寸けらはで、こちやくだれくだれ [青森]

※「さんじゃく」は兵児帯、「けらは」は「くれるから」で、「兵児帯を三寸(約9cm)くれるから、こっちに下がって来い」という唄。

○螢来い来い、ちょ来い来い、山になにを忘れた、硯箱、手箱、硝煙、がらがら [神奈川]

- ほうほう 螢来い、あんたんばらから潜^{くぐ}って来い、落ちるなや、落ちればこんばんの三がいで [石川]
- ほにほうたるこおいこい、一服せんか、竹の節に腰かけて、庭竹藪の露飲ましょ [石川]
- ホイホイ ほたる来い来い来い来い、ほたるの虫を紙に包んでホイホイ [福井]
※ 思いがけずホタルを見つけた時など、籠がないので紙に包んで持ち帰ったことがあったといい、それを踏まえて歌われたものか。
- 螢来い、飛んで来い、お家は綺麗な螢籠、御馳走しましょ草の露、ピカピカと灯をともせ [福井]
※(創作)童謡のような歌詞。
- 螢来い、油がない、火も焚かぬ、手習が出来ぬ、早く来い、早く来い [長野]
※「手習が出来ぬ」は、螢雪の故事を踏まえた歌詞であろう。
- ほほほたる来い、ほたるさんはいらんかい、赤いちょうちんかぞえて、青いちょうちんかぞえて [広島]
- ほうほう 螢よ、水くりょう、水につつんだら、たましんじろ、たまかづら [滋賀]
※ 南 (1961) によると、「しんじろ」は「死ぬ」の意であろうという。すると「たま」は「魂」の意か。
- ほほ 螢来^け、螢の尻のすあ、かまぼこ尻、お医者さんに見せたら、ようなった [福岡]
- ほだいろ、ほだいろ、ほだいろの虫はさし虫で、親のためとて火をとぼせ、火をとぼせ [青森]
※ さし虫はやさしい虫の転訛とされる。
- ほうだる^{ほどね}こ、ほい、ほい、ほい、螢のけつつ尻さ火ついだ、あっちの方でも火ついだ、火ついても熱^{ほどね}無い [青森]
※ ホタルをはじめとした発光生物の光は、ほとんど熱をともなわないため冷光と呼ばれる。昔の人々にとって生物発光はとても不思議な光だったのが、この唄にも現れている。
- 暗くなる 暗くなる、向こうの山から暗くなる、草の中のほほ螢、提灯つけて出たおいで [福井]
※ 叙景的な歌詞の唄。日が沈み暗くなり始めた頃に歌ったのだろう。まだ光り始める前の草の葉に止まっているホタルに呼びかけている。
- ほいほい、螢という虫は、油のないのに灯をともす、ちんちくしょう、ちんちくしょう [和歌山]
※ 油がないのにも関わらず、光を発することができるホタルに対して、羨ましいという悔しさがにじみ出ている。

三谷 (1954) は螢狩の歌についてカタツムリの方言圏論と同様に、〈螢の親父型〉〈山道来い型〉〈あっちの水型〉の順に当時の文化的中心である京都周辺で生じ、周辺へと順次伝播していったとみている。これらに対し (2) 一定の地域で歌われた唄や (4) 限定された地域で歌われた唄、(5) 類縁関係の認められない独特の唄はそれぞれの地方で生じたものとみてよからう。(5) の唄が作られそれが受け入れられるとやがて周辺地域へと広がり、その過程で歌詞の変化が起こり類歌が生まれ、(4) の主に1都府県内程度の分布域を持った唄へと成長していく。さらに分布域が広がれば県境を越えて (2) の一定地域で歌われる形式の唄になる。(4) で留まるか (2) へ成長するかは時間的な問題の他にも、その地方の地理的特徴や人の移動などいくつかの要因が関係したのではなかろうか。一方、(2) や (4) の唄には、(1) の唄が伝播した先で特有の型の唄へと変化したと考えられる唄もある。

(4) や (5) の伝承地域が限られている唄は、現在残っている記録にたよるしかない。たとえば、(4) の⑥〈油のないのに型〉と⑦〈お前のお連れ型〉は、宮本 (1936) の和歌山で昭和初期頃に採集されたと推定される唄の論文でのみ確認でき、もしこの報告がなければ知ることが出来なかつただろう。しかし、戦前に地方のわらべ唄がまとまって報告された例はわずかしがなく、今日まで残ることなく失われた型の唄があったかも知れない。また、(4) と (5) の唄の境界は曖昧で、現在では (5) に分類される唄にも実際には類歌が存在した可能性もある。

6. 螢狩の唄の地域性

本城屋（1982）は民謡とわらべ唄の属性の“郷土性”について、民謡は歌意や曲調にその土地の匂いを有するが、わらべ唄はただ語句だけを方言化したもの、と述べている。たしかに本城屋の指摘通り、螢狩の唄にはその土地の匂いを有する郷土性はない。しかし、螢狩の唄は多くの型と多様化した語句の組みあわせから多種多様な唄が生じ、それがそれぞれの地域特有の唄となっていることも事実である。ここで地域に特有の唄を生じた要因として、語句の方言化や地名・河川・寺社などが歌詞に出てくる例をみていきたい。

語句の方言化の例としては、前出の語句以外にも青森・岩手・宮城・福島の「南蛮畑（トウガラシ畑）」をはじめ、香川の「すこけて（すべってころんで）」（山崎，1982），秋田の「ひいつき（終日）」（秋田教育研究所，1964），長野の「ちゃっと（早く，急いで）」（松山，1972），岐阜県飛騨地方の「ゴミゴミしょ（混雑している様子を表す副詞）」（久野，1981）など多くの例があり、このように方言で歌われることにより唄の地域化が生じる。

唄の地域化は方言以外にも見られる。山形県最上町では「からむし畑」が歌われているが、これは最上川流域の特産品である麻を栽培する畑のことである。また、同町には「エモノゴ（里芋）畑」の歌詞もあるが、山形の郷土料理“芋煮”に使用される里芋の畑は、他の地域よりも身近に感じられたのだろう。

江戸時代後期の随筆『嬉遊笑覧』（喜多村信節著，文政13年（1830）刊）巻十二・禽虫・石山螢谷の割注に

上州にて小児螢を呼に、ほうたるこうおのがてての合子てかふら川の水くれう 高崎の辺に蕪川とい
う河あり

とある。かぶら川は利根川水系で群馬県西部の甘楽富岡地区を流れる現在の鏑川のことである。この唄のように、川の名前や地名、寺社などを歌詞に取り込んだ唄もあり、いくつか例をあげる。

○安渡の光コ たよりに来い、螢来い やんふし来い、安渡の光コながめで来い [青森]

※〈山道こい型〉の唄で、「行燈の光」に大湊港の旧名である「安渡」を掛けている。

○螢来い来い、露のんで来い来い、鎌倉かいどの灯をとませ [神奈川]

※「鎌倉かいど」は、鎌倉時代政治の中心地であった鎌倉へ向かうために整備された鎌倉道のこと。鎌倉街道は江戸時代になってからの呼び方で、鎌倉を擁する神奈川らしい唄。

○螢こい、常念坊、風の宮の水くりよ、つれになるなら こっちへござれ [三重]¹³⁾

※「風の宮」は伊勢神宮外宮の風雨を司る神を祀る境内別宮の風宮のこと。

○ほたる来い 田の虫来い、行燈あんどんの光で 笠着て来い、あっちの乳はにがいぞ、こっちの乳はあまいぞ、天野川の水飲まそ [大阪]

※交野市を流れる「天野川」は淀川の支流で、妙見山を源流とし交野市・枚方市を流れる川である。尾原（2009）の『『甘い』を受けて『天の川の水』と歌うところがこの歌の特徴です』という注解を踏まえると、地元の川である天野川に「甘い」を掛けたのかも知れない。

○ほほほたる来い、こっちの水は甘いぞ、あっちの水は苦いぞ、ほほほたる来い、神田こうだの山からすこけて、飛んで来い [香川]

※「神田」は三豊郡山本町（現三豊市）の地名（山崎，1982）。

○ほたる来い義安寺、あっちの水は苦いぞ、こっちの水は甘いぞ、甘い水を飲みに来い [愛媛]

※松山市の唄。「義安寺」は道後の寺で、義安寺の前を流れる石手川はかつてはホテルの名所であった。義安寺には戦国時代末期、豊臣秀吉の四国攻めの折、この地の支配者だった河野氏の家臣が義安

寺に集まり、二君に仕えずと自刃し、その靈魂がホタルになったという伝説が残る（楠，1976）。

○ほうほう螢こい，鉄砲町の坊さんが，提灯とぼして，待ちちよる 待ちちよる [福岡]

※ 田川地方の唄。「鉄砲町」は，田川郡伊田町字伊田小字鉄砲町（現田川市伊田鉄砲町）のことで，「昔寺院ありしという所」という（小野，1990）。

福岡県北九州市門司区の

○ほほほたる来い，一本松の嬢さんが，提灯とぼして来いとこせ，あっちの水はにがいぞ，こっちの水はあまいぞ，ほほほたる来い

は〈提灯とぼして型〉に〈あっちの水型〉が混合した唄であるが，歌詞に出てくる「一本松」ははるきし春吉志を流れる相割川のほとりの松のことで（友野，1988），地元の人にとって唄を聞けば「ああ，あそこか」と直ぐに分かるランドマーク的なものだったのであろう。

おわりに

本報では前報（2023）の分類試案（2）の唄の追加ならびに（4）（5）を提示した。また，俚謡やわらべ唄からの歌詞の転用・借用と思われる例を検討した。さらに，呼びかけの言葉・誘いの言葉・指示する言葉や，ホタルの呼称・異称を拾い出し，語句が多様化している実態を見た。これらは多様な唄の型とともにさまざまに組み合わせられ，地域特有の唄を成立させる要因となっている。また，螢狩の唄の語句の方言化や地名が取り込まれている例を確認し，唄の地域化の一端に触れた。

注)

- 1) 盆の頃，主に女兒が列になり，宵の町を歩きながら歌った盆唄。歌い出しから「おんごく」と呼ばれ，わらべ唄に分類される。
- 2) チョウのわらべ唄は，江戸時代に紙の蝶のおもちゃを売る行商人「蝶々売り」が歌い歩いた。文部省唱歌「蝶々」は一番を野村秋足が郷里愛知県岡崎市のわらべ唄を元に作詞した。原曲は長い間スペイン民謡とされてきたが，ドイツの童謡「幼いハンス」であることが明らかになっている。戦後，野村の歌詞を改作し，2番以降を廃止したものが教科書に使用され，現在広く知られている歌となった。
- 3) 『守貞漫稿』には続いて「ほうちこい，落たら玉ごの水のまそ」の唄が載るが，三石（2002）はこれを東京都の唄としている。これは明らかに誤りであり，方言からもホタルを東京で「ほうち」と呼んだ記録はない。
- 4) 粥餅（「けいもち」または「かいもち」）は一般的には「そばがき」を示すが，地域によっては「ぼたもち・おはぎ」を指すという（三石，2002）
- 5) 「柳もち」が具体的にどのようなものか分からないが，香川県丸亀市では餅花（小正月に柳や榎木などに紅白の餅を付けたもの）のことを柳もちと呼んでいるので餅花のことかとも考えられる。
- 6) 螢籠に入れる草を「螢草」と総称する。さまざまな草が利用されているが，その一つにツユクサもあり，螢草はツユクサの別称にもなっている。
- 7) 柳田国男は『火の昔』の中で，行燈が元は携帯照明器具であったことを述べている。
- 8) 『大安町史』（1993）では，三重県大安町（現いなべ市）の唄に「螢来い，コウムシ光虫来い」と「光虫」の字を当てている。三重には「小虫来い，大虫来い」という唄があるので「小虫」が妥当である。
- 9) 栃木のトンボの唄の「源二郎」のように皆無ではないが極めて少ない。
- 10) 似た語句である石川県金沢市の唄の「めんだる」も，南（1961）は「かあいい」と注している。
- 11) 長谷川（1987）は「やんま」を「山ぼたる」の転訛と推定している。姫路市にはゲンジボタルの方言でヤ

ンマがある『集覧』。

- 12) 「てての合子」について、村尾（1919）は「てて」を父親と解釈して、父親の腕としているが、「てて」は「手手」で水を掬うのに両手を合わせて器にした状態ではないだろうか。合子（ごうし・ごうす）は蓋付きの小さい容器のことだが、尾原（1991）は合子に「はこカ」と仮名を振っている。三石（2002）はそのまま「合子（はにか）^(ママ)」と引用しているが、「はこカ」の「カ」は疑問の終助詞である。
- 13) 採集地は宇治（神田，1935）または宇治山田（村尾，1919；三谷，1954）で現在の伊勢市。南（1961）は京都の宇治市と勘違いしたのか、採集地を京都府宇治としている。三石（2002）は資料編・京都府に、相馬（1976）からの引用としてこの唄を紹介しているが、相馬の著作にはこの唄は掲載されておらず、南の記述を相馬と誤ったものであろう。

わらべ唄・民謡出典一覧

- 安藤潔編（1999）越後粟島のわらべ唄。粟島浦村教育委員会。
- 千葉瑞夫（1985）岩手のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 2 下。柳原書店。
- 童謡研究会編（1909）諸国童謡大全。春陽堂。
- 服部勇次・東仁己（1992）三重のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 14 上。柳原書店。
- 平井英次（1983）多摩方言と生活。教育報道社。
- 伊藤祐忠（1943）越前地方の童唄。福井郷土研究会。（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 岩井正浩（1982）愛媛のわらべ歌（愛媛 香川のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 21 所収）。柳原書店。
- 北原白秋編，藪田義雄責任編纂校訂（1954）日本伝承童謡集成第 2 巻 天体気象・動植物篇。三省堂。
- 倉田正邦編（1955）三重県民謡集 わらべ唄。三重県民謡研究所。（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 黒河健一（1973）伊予のわらべ唄 愛媛文化双書 7。愛媛文化双書刊行会。
- 前田林外編（1907）日本民謡全集続編。本郷書院。（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 右田伊佐雄（1980）大阪のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 16。柳原書店。
- 右田伊佐雄（1986）滋賀のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 14 下。柳原書店。
- 宮本国子編（1936）和歌山県俚謡集 郷土研究第二輯。和歌山県女子師範学校・和歌山県立日方高等女学校郷土研究室。（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 望月敬明（1988）福井のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 10 下。柳原書店。
- 尾原昭夫（1984）千葉のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 6 下。柳原書店。
- 尾原昭夫（1991）近世童謡童遊集 日本のわらべ歌全集 27。柳原書店。
- 尾原昭夫編著（2009）日本のわらべうた 歳事・季節歌編。文元社。
- 小野芳香（1990）田川地方民謡・童謡研究集。葦書房。
- 高橋美智子（1979）京都のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 15。柳原書店。
- 高山西小学校研究部編（1933）飛騨の伝説と民謡。高山西小学校研究部刊。（国立国会図書館デジタルコレクション）
- 竹内利美（1936）小学生の調べたる上伊那川島村郷土誌続編。アチックミュージアム彙報第七，251pp。
- 竹久夢二編（1922）あやとりかけとり 日本童謡集。春陽堂。（国会図書館デジタルコレクション）
- 友野晃一郎（1988）福岡のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 23 上。柳原書店。
- 山本修之助編著（1985）佐渡のわらべ唄。佐渡郷土文化の会。
- 山崎盾之（1982）香川のわらべ歌（愛媛 香川のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 21 所収）。柳原書店。

文 献

- 浅野建二 (1988) 新講 わらべ唄風土記. 柳原書店.
- 阿部光典著・神奈川昆虫談話会編 (2013) 昆虫名方言事典 昆虫名方言を求めて. サイエンス出版社.
- 秋田教育研究所編 (1964) 秋田県郷土資料—こどもと環境—. 研究, (65). 秋田教育研究所.
- 大安町教育委員会・大安町編 (1993) 大安町史第2巻. いなべ市.
- 後藤好正 (2021) 螢狩の唄考 3～螢狩の唄と田の神について～. 豊田ホテルの里ミュージアム研究報告書, (13): 85-98.
- 後藤好正 (2023) 螢狩の唄考 4～螢狩の唄の分類と多様化の要因について～. 豊田ホテルの里ミュージアム研究報告書, (15): 111-124.
- 長谷川栄治 (1987) 兵庫のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 18 上. 柳原書店.
- 本城屋 勝 (1982) わらべうた研究ノート. 無明舎出版.
- 堀場宗泰 (1983) 静岡のわらべ歌 (山梨 静岡のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 11 所収). 柳原書店.
- 今井昌子 (1982) わらべ唄の発想と表現. 同志社国文学, (20): 37-55. 同志社大学国文学.
- 伊奈森太郎編 (1953) 愛知県地方の古歌謡第二集 (日本庶民生活史料集第 24 巻所収). 私家版.
- 上笙一郎 (1972) 日本のわらべ唄—民族の幼ごころ—. 三省堂.
- 金沢口承文芸研究会編 (1981) 金沢のわらべ唄と民謡. 金沢市教育委員会・金沢口承文芸研究会.
- 神田左京 (1935) ホタル. 日本発光生物研究所.
- 河原嘉助 (1981) 尾張 わらべうた. 泰文堂.
- 工藤 祐著, 苫米地頭他編 (2008) 青森県南部地方の方言・民俗第三巻 (史料集). 工藤祐幸発行.
- 久野壽彦 (1981) 岐阜のわらべ歌 (長野 岐阜のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 13 所収). 柳原書店.
- 楠 博幸 (1976) 愛媛の昆虫歳時記. 第一法規出版.
- 黒坂富治 (1988) 富山のわらべ歌 日本のわらべ歌全集 9 上. 柳原書店.
- 松山義雄 (1972) 山国のわらべうた. 社団法人信濃路.
- 南喜市郎 (1961) ホタルの研究. 私家版.
- 三谷栄一 (1954) 螢狩の唄と田の神. 日本民俗学, 2(1) : 25-53.
- 三石暉弥 (2002) ほーほーホータル来い. 川辺書林.
- 村尾節三編 (1919) 童謡. 洛陽堂. (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 仲井幸二郎 (1976) 類型の詞章. ことばの遊びと芸術 (池田弥三郎編) 日本語講座第二巻所収. 大修館書店.
- 齋藤義七郎 (1931) 我が村の童詞童謡. 方言と土俗, 1(10) : 3-4. 一言社. (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 仙台中央放送局編 (1937) 東北の童謡. 日本放送出版会.
- 相馬 大 (1976) 京のわらべ唄. 白川書院.
- 墨 功恵 (2007) わらべ歌考察—全国の「草履隠し歌」—. 愛知県立大学大学院国際文化研究科論, (8) : 59-81.
- 高木誠一 (1955) 磐城北神谷の話 常民文化研究第 75. 日本常民文化研究所. (国立国会図書館デジタルコレクション)
- 太平洋資源開発研究所編 (2000-05) 全国方言集覧 動植物標準和名⇒方言名検索大辞典 第 1-7 期. 太平洋資源開発研究所刊.
- 武田 正 (1981) 山形のわらべ歌 (秋田 山形のわらべ歌 日本わらべ歌全集全集 3 所収). 柳原書店.
- 山崎正七 (1976) 讃岐のわらべうた 市民文庫シリーズ 5. 高松市.
- 柳田国男 (1949) 分類児童語彙上巻. 東京堂.
- 柳田国男 (1970) 火の昔 (定本柳田国男集第 21 巻所収). 筑摩書房.